地質ニュース493号，6頁，1995年9月
Chishitsu News no. 493, p. 6, September, 1995

—巻頭エッセイ—

“情報”についていろいろ考えた

吉井守正[1)]

私が“情報”というコトバを初めて耳にしたのは1944年の秋で，小学校(当時は国民学校)1年生のときだった．太平洋戦争は我が国の敗色が濃厚になり，米軍の手に落ちたサイパン島から発進するB29爆撃機による本土空襲が始まった．ラジオ番組が中断され，「ピー」というブザーの音に続いて，「東部軍管区情報．東部軍管区情報．敵機は…」と米軍機の接近を知らせる“情報”が入り，街に警戒警報のサイレンが鳴り響いた．

当時，教師から教えられたことを思い出すままに記すと，「天皇陛下は現人神(あらひとがみ)で大元帥」「日本はこれまで戦争で負けたことはない．だから今度の戦争にも勝つ」「米兵は野蛮人で，捕虜の耳を切り取り，火にあぶりソースをつけて食べる」「米兵は命が惜しいから降参して捕虜になるが，日本兵は大和魂があるから玉砕する」….

本土が空襲されているのに，軍部(大本営)の発表は輝かしい戦果ばかりだったように記憶している．45年8月に原爆投下，ソ連参戦．だが天皇みずから終戦の詔勅をラジオ放送したときも，“神州不滅”を信じていた大人達は「そんなに早く手をあげなくてもいいのに」と話し合っていたのを覚えている．

ことしはオウム真理教にまつわる事件がマスコミを賑わせた．どうやら“出家信者”達は，一方的な情報しか与えられないために，かたよった価値感をもつようになったらしいことが盛んに報じられた．

この報道を聞くにつけて，私が小学1年生の頃に体験した戦時中の記憶と重なるところが多かった．たたき込まれた“教義”に疑問を発することさえ許されない状況も，軍国主義時代とよく似ている．

だが現代は，フツーの人なら情報が自由に手に入る時代であると，本当に言えるだろうか．震災やオウムの報道でも，マスコミ各社が派手に取り上げる割には，核心部分がいまひとつ伝わって来ないもどかしさをしばしば感じた．これは“ネズミがネコをかんだら記事になる”式の商業主義の結果ではないだろうか．外国誌のように，数表やグラフを用いて定量的な情報を提供し，読者に考えさせる姿勢を，我が国のジャーナリズムに望みたい．

情報がはんらんする中で問題なのは，コトバの独り歩きである．“活断層”がよい例だ．「我が家の付近に活断層はないか」というたぐいの問い合わせが，一般市民から私のもとにも数多く寄せられた．

さきの震災をきっかけに，当所発行の“活構造図”の売り上げが急上昇し，急に増し刷りしたほどである．“当所の社会への貢献”として喜ばしく思う反面，“活断層”の独り歩きの結果，出版物が誤った(不法な)使われ方をしないか，心配にもなる．

思えば，教育現場の“偏差値”も，多分に独り歩きの傾向が強い．今後は，受けた情報を正しく読みとり，取捨選択するワザが各人に要求される．情報の鵜呑みは“現代の迷信”を広めるだけである．

情報の電子化技術が飛躍的に進歩して，今後ますます多量の情報が世間に飛び交うことになる．情報は生鮮食料品と同じで，つねに“鮮度”を要求される．電子情報を経常的に送受信し管理するためには，人とカネと新しい枠組が必要である．

電子ネットワークの発達によって，不特定多数の人が他人のデータ(汗と努力の結晶)を簡単に入手できるようになる．その著作権をどう守るかなど，面倒な問題も新たに生じる．医学の進歩に伴って“医の倫理”が改めて問題となるように，情報に関しても，人の知恵と倫理が問われる時代になってきた．

1) 地質調査所　地質情報センター長

キーワード：情報